

## 事例 6 北海道における国有林採種園が果たす役割

(北海道森林管理局)



- 北海道旭川市(あさひかわし) 雨紛(うぶん)採種園
- カラマツ球果



- 北海道足寄郡(あしよろぐん)陸別町(りくべつちょう) 陸別採種園
- 母樹の間伐後の様子

北海道では、成熟化した人工林の伐採量の増加とそれに伴う造林面積の増大により、苗木の需要増が見込まれ、遺伝的に優れた種子の安定的な供給が求められています。国有林採種園では、北海道において採取されたトドマツ・カラマツ・アカエゾマツ種子のうち、約7割以上を供給しており、特にトドマツの種子は、道内で採取されるほぼ全量が国有林採種園から採取されています。しかし、母樹が込み合い採種園内の光環境の悪化により実の成りが悪くなることや、母樹の樹高が高くなり種子の採取が困難となることより、このままでは必要な量を確保することが難しくなることが懸念されていました。

こうした状況を改善するために、北海道森林管理局では、平成27年度よりカラマツ採種園、平成28年度よりトドマツ採種園の再整備に取り組んでいます。具体的には、光環境改善のための母樹の間伐や、種子の採取のため、高所作業車等の導入のための路網を整備しています。令和2年度についても整備された路網を活用し、高所作業車等を用いて、種子の採取を行うなど、道内で必要とされる種子量の確保に取り組みました。

引き続き、北海道での再造林に不可欠な苗木生産に向けて、種子の安定供給という重要な役割を果たせるよう、関係機関と連携し取り組んでいくこととしています。